
歌う酔っ払い

うぐいふみ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

歌う酔っ払い

【著者名】

Z5580D

【あらすじ】

通勤途中、駅の構内で見た酔っ払い。でも、そのおひさまんは普通の酔っ払いとちょっと違うのだ。

それは朝、通勤途中の駅の改札内でのこと。電車から降りてホームの階段を登りきると、そこに歳の頃なら五十か六十ぐらい、地味な色合いの作業着のよつなものを着たおつちやんが立っていて、何やら歌っている。大声で、しかも手には自動販売機で買ったと思われるカップ酒。酔っ払いである。

酔っ払いといつのはよく歌つてゐるのだから、それ自体は（朝っぱらからといつことを除けば）珍しくもない。けれども、このおつちゃんがただの酔っ払いと違うのは、その声がとてもなく美声だということだった。

歌つているのは演歌だつたけれど、音程のぶれもなく本当によく通るテノールで、特に長くのびる声（専門用語で何といふのかは知らない）がすばらしい。声量もあって、何だか物凄くよく響く。特別な音響効果もない、ただの駅の改札口なのに。

これほどの美声を生で聞くのは初めてだった。テレビに出ているどんな歌手よりずっとうまいと感じる。むしろ、まるでプロの声楽家のような声の質なのだ。

これで朝っぱらから酒を飲むような酔っ払いでなかつたら、賛辞の言葉と共におひねりの一つや一つあげても全然惜しくはないのに。酔っ払いじゃあ、何だかこわくて近付けないじゃないか。ほんと、もつたいない。

以上何年か前の、ほとんど通りすがりの出来事でしたが、ちよつと得したかなと思った次第です。

朝のどんよりした気分に新鮮な驚きをえてくれた、あの日のお

つちやんに幸あれ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5580d/>

歌う酔っ払い

2010年10月11日21時14分発行